

#背景

おくすり110番

1. 児童・地域住民に「くすり教室」を通して、「適正使用」を支援

病気の予防・治療や健康の維持のために、薬はなくてはならない存在です。

最近では、市販薬などを上手に使って自分の健康の維持や病気の予防・治療にあたるセルフメディケーションが推進されています。

薬学生が、薬やその情報の管理方法、さらにはこうした知識を育成し地域ヘルスケアサービスを支援することは今後の地域密着型医療社会に重要です。



2. 児童・地域住民に「くすり教室」を通して、「薬物乱用」を啓蒙

薬は年齢を問わず身近な存在であり、インターネットやコンビニエンスストアでも購入することができます。

乱用薬物もインターネットの普及から入手が容易になり、薬物乱用の低年齢化が進行しています。

薬物乱用の怖さを児童・地域住民に啓蒙することは、薬物乱用の抑止へと繋がります。



3. 児童・地域住民に「くすり教室」を通して、「お薬手帳の活用」を推進

お薬手帳とは、使用している薬の情報だけでなく、既往歴や副作用歴、アレルギー歴などの患者情報を記録し、安全に薬を使用してもらうための管理ツールです。

東日本大震災では、多くの患者さんが毎日飲んでいて薬を失ったばかりでなく、病院や調剤薬局に保管されていたカルテや記録も見ることができなかつたため、救護所の医師や薬剤師は、患者さんが飲んでいて薬を特定できず、適切な対応ができませんでした。

一方で、お薬手帳の活用により、スムーズかつ適切に必要な医療や薬が提供される場面も見受けられました。

児童・地域住民がお薬手帳の重要性を学ぶことで、自分を守るお薬手帳のさらなる普及・活用が期待できます。

